P-3 子宮内膜癌におけるpS2蛋白発現の
免疫組織学的検討

天理よろづ相談所病院

越山雅文, 小西光長, 竹村真紀, 由良泰一郎,
松下克子, 林 道治, 吉田益美, 田内圀彦

【目的】内膜癌の発生過程におけるエストロゲン
関与の有無を検討する目的で, エストロゲン誘導
蛋白であるpS2蛋白の発現を内膜癌, 内膜増殖
症において調べた。【方法】内膜癌30例, 内膜
増殖症9例, 正常性周期内膜10例のパラフィン
切片を用い, pS2及びprogesterone receptor
(PR)の発現を各々に対するモノクローナル抗
体(pS2; Japan Tanner社, PR; Abbott社)で免疫
組織染色を行い, 発現の特徴や局在を検討した。

【成績】pS2は正常内膜腺上皮にも発現を認め
たが, 内膜増殖症で強発現を示した(9/9例)。
また, 内膜癌でも23/30例(76.7%)で
pS2発現を認めた。pS2陽性内膜癌患者の平
均年齢(53.78±8.96才)は, 陰性患者
(59.86±6.91才)に比べて低く(p<
0.05), 組織分化度は18/23例(78%)
でG1を示し(p<0.001), その発現はP
R発現(18/23例, 78%)とよく相関して
いた(p<0.001)。中でも, pS2は初期
高分化型癌で強発現を示した。一方, pS2陰性
7例全てでPR陰性を示し, 4例(57%)では
non-endometrioid typeを示した。pS2発現の
局在に関しては, 陽性内膜癌に隣接する内膜及び
内膜増殖症は閉経の有無に関わらず強発現を示
したのに対し, 陰性内膜癌に隣接する内膜は発現を
認めなかった。【結論】内膜癌に隣接する内膜や
内膜増殖症, 及び初期高分化型内膜癌でpS2の
強発現を認めたことより, 内膜癌発生の初期段階
に過剰エストロゲン作用の関与が示唆された。
一方, 高齢の一部の内膜癌発生にエストロゲン関
与の無い事が示唆された。

P-4 ヒト子宮内膜癌でのTopoisomerase
IIの発現

東北大, 同第二病理*

伊藤 潔, 笹野公伸*, 早川清一郎, 佐藤信二,
矢嶋 聡

【目的】DNA Topoisomerase II (Topo II)は環状
二本鎖DNAを同時に切断および再結合する酵素で
あり, S期後半よりG2/M期に急速に発現し分裂終
了に伴い急減するとされる。今回, ヒト子宮内
膜癌におけるTopo IIの発現を免疫組織化学的に検
討し, in situでの細胞増殖動態を検討した。また一
部の症例では隣接切片でKi67との比較検討を試み
た。【方法】正常子宮内膜12例(増殖期7例, 分
泌期5例), 増殖症14例(腺腫性増殖症7例, 異型
増殖症7例), 内膜癌30例(G1 12例, G2 10例,
G3 8例)のパラフィン包埋標本(8%パラホルム,
10%ホルマリン)を使用した。一次抗体として8D2
(抗α type)モノクローナル抗体(三菱化成生命科
学研究所 菊池韶彦博士より恵与)を用い,
autoclave処理後ABC法にて免疫染色を施行した。

【成績】Topo IIの発現は核内に認められた。
Labelling Indexは増殖期内膜24.0%, 分泌期内膜
2.1%, 腺腫性増殖症25.7%, 異型増殖症47.1%,
内膜癌60.7%(G1 60.8%, G2 55.8%, G3 66.8%)
であり, 異型増殖症および内膜癌は, 増殖期内膜
および腺腫性増殖症に比して, 有意に陽性率が高
かった。Ki67との比較では増殖期内膜, 腺腫性増
殖症においてKi67の陽性率はTopo IIに比して高い
傾向にあったが, 異型増殖症および内膜癌での陽
性率の増加は同程度であった。【結論】1. Topo II
の免疫組織化学的検討によりS期後半からG2/M
期に相当すると考えられる増殖細胞を病理組織切
片上で同定できる事が示唆された。2. Topo IIの陽
性率が, 異型内膜増殖症において腺腫性増殖症よ
りも有意に高いことより, 両者はTopo IIで検索し
た細胞増殖能および生物学的悪性度に相違がある
とも考えられた。